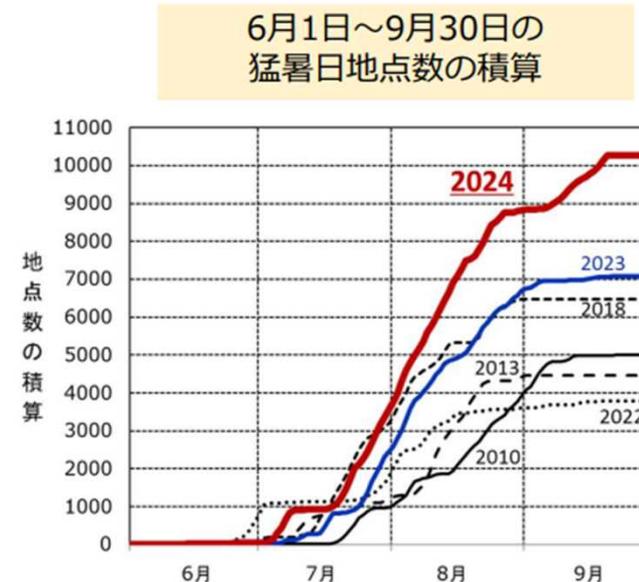
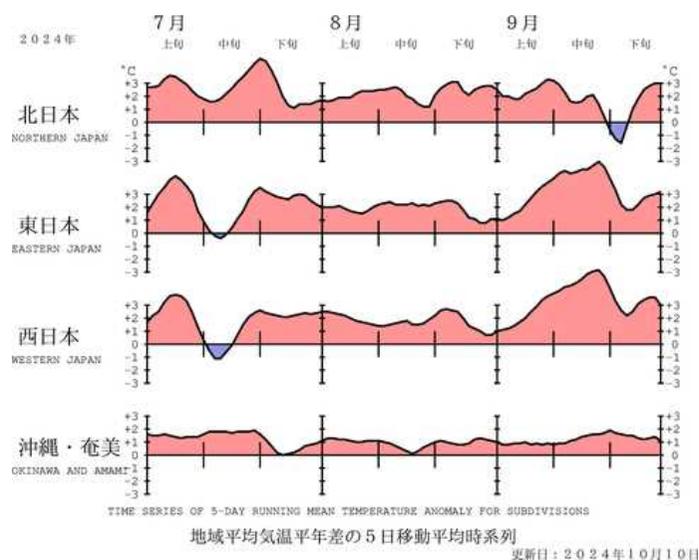


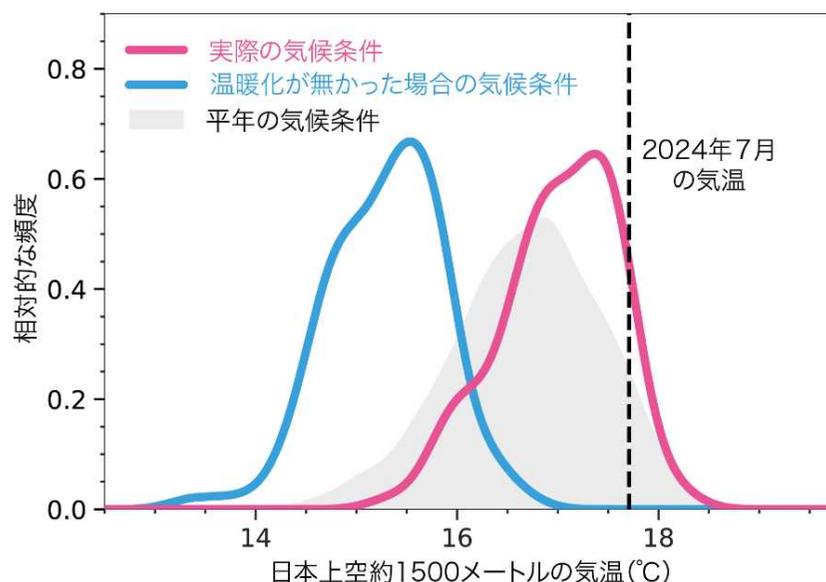
# 令和6年7月～9月の顕著な高温について

- ・ **令和6年7月**の月平均気温平年差は、東日本で $+2.3^{\circ}\text{C}$ 、沖縄・奄美で $+1.3^{\circ}\text{C}$ となり、1946年の統計開始以降の7月として沖縄・奄美では1位、東日本では1位タイの高温となった。
- ・ **令和6年8月**は、西日本中心に顕著な高温が持続。
- ・ **令和6年9月**の月平均気温平年差は、東日本、西日本と沖縄・奄美でそれぞれ $+3.2^{\circ}\text{C}$ 、 $+3.4^{\circ}\text{C}$ 、 $+1.1^{\circ}\text{C}$ で、統計を開始した1946年以降の9月として、東日本と西日本は1位、沖縄・奄美は1位タイの高温となった。
- ・ **6月1日～9月30日の猛暑日**（日最高気温が $35^{\circ}\text{C}$ 以上）地点数の積算は10,273で、比較可能な2010年以降で最も多くなった。



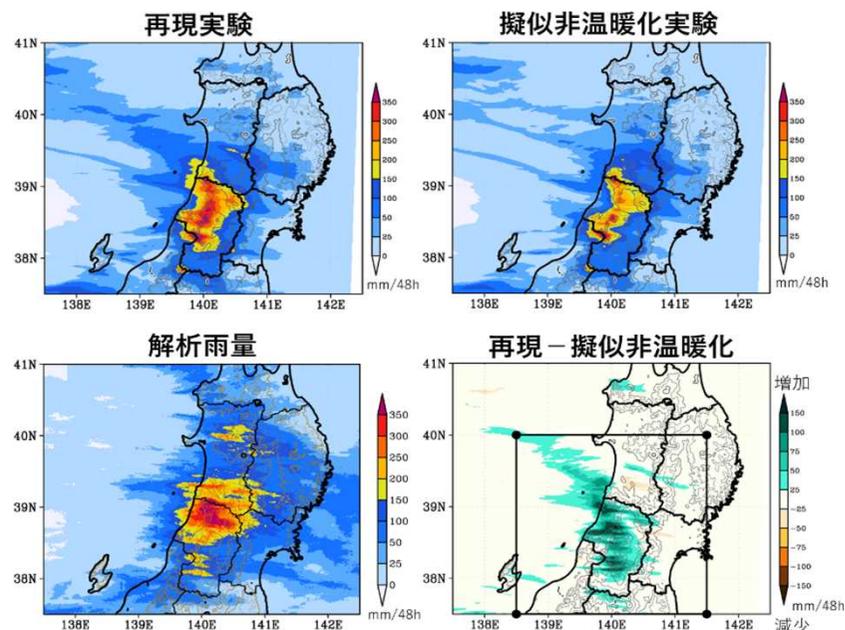
# 令和6年7月の顕著な高温及び7月下旬の大雨における地球温暖化の影響

地球温暖化の影響を評価するイベント・アトリビューションの手法を用いて 文部科学省気候変動予測先端研究プログラムの合同研究チームが速報的に評価を行ったところ、地球温暖化が無かったと仮定した条件下では7月の記録的な高温はほぼ発生しなかったことや、地球温暖化の影響で7月下旬の山形県・秋田県を中心とした大雨における降水量が増加した可能性があることが分かった。



## 地球温暖化の有無に依存した2024年7月の高温イベントの発生確率

横軸は日本上空（東経130-146度、北緯31-45度）約1500メートルの平均気温、縦軸は頻度（平均期間は7月1日～31日）。赤線は実際の（温暖化がある）2024年7月の気候条件下の頻度、青線は温暖化がなかったと仮定した場合の2024年7月の気候条件下の頻度。薄灰色の山型は、1991年から2020年の30年間の7月の出現頻度。2024年7月の実測値を表す黒破線の値を超えた面積が今回の高温イベントの発生確率を表す。



## 7月24日～26日の大雨事例のシミュレーション

（左上）実際の（温暖化がある）7月24日の9時から26日の9時までの48時間積算降水量(mm)。（右上）温暖化が無かったと仮定した場合の同期間の積算降水量(mm)。（右下）両者の差(mm)。（左下）同期間で積算した解析雨量(mm)